学会報告[地方会抄録]

第 41 回 日本心身医学会東北地方会 演題抄録

会 長：佐々木 大輔（弘前大学保健管理センター）
日 時：1995 年 9 月 23 日（土）午前 9 時より
会 場：日本生命青森支社 4 階大会議室

1. 定年を契機に再燃をみた過敏性腸症候群に対する
counseling の経験
弘前大学附属病院医療相談室1 石沢内科胃腸科2 弘前大学
保健管理センター3
○橋 澤子1 石沢 誠2 佐々木大輔3

症状：66 歳、男性。臨床診断：過敏性腸症候群、現病歴：16 歳から下痢がある。会社社長を勤めましたが、当時は薬は飲んでも不快な症状はなかった。2年前から従来の薬では下痢が止まらなくなった。腹部不快感も強くなり、面接所見：交流分析の立場からのカウンセリングを主に4回の面接を行った。定年退職で単身赴任も終わり、うつ病の妻と毎日を送っている。身体症状のみに関心があったので、心理面も含めて向上させたところ家族関係や自己のあり方に気づきを得、自他を受容することができるようにになった。本症例はカウンセリングによって気づきを導き、医師の治療への協力に成功した。

2. 看護学生のエゴグラムの変動—2 年次と 4 年次の比較—
弘前大教育学部特別教科（看護）教員養成課程
○米内山幸子 花田久美子 本村 美美

目的：当課程学生の 2 年次と 4 年次のエゴグラムの変動を知り、看護基礎教育の指導の手がかりとする。
方法：対象は当課程女子学生 97 名、エゴグラムは専門教科の講義をほとんど受けていない 2年次後期と 4年次後期（卒業時）に実施。また、2年次には Y-G 性格検査と Cornell Medical Index (CMI) も調査した。
結果：平均プロフィールは 2・4 年次とも CP が低く NP の高い N 型を示し、NP は卒業時に有意に高く、実習成績の低いものが問題となる Y-G 性格検査の B 型かつ CMI の領域 III の学生 6 名のエゴグラムの変動をみたが、NP あるいは A が高くなり望ましい変化のみられた者 3 名、AC 優位となった者 3 名であった。結語：以上より、学生の着任者としての望ましい自我の成長がうかがわれた。今後もエゴグラムを個々の指導に活用していきたい。

3. 心臓神経症として 13 年間治療したが、食道憩室切除術で治癒した 1 例
黒田内科胃腸科医院1 弘前大学第一内科2
○黒田 正宏1 黒田 迪子 石渡善和子
田村 聡子 長谷川裕子2

症例は 38 歳、男性の高校教諭。主訴は胸内苦悶と動悸、会合で飲酒をし、帰宅後に水なしで歯の痛み止めを飲んだ。その後、次第に痩せ海淀された感じが、それが前胸部に広がり、呼吸が苦しくなり、動悸を感じた。恐怖感のため救急車を呼んで A 病院受診、特に異常なしと診断された。以後、反対して発作が起きた。胸病院を経て、B 大学病院で精査を受けた。その結果、心臓神経症疑いとして当院に紹介された。治療は自律訓練法を主に実施し強い発作は改善できてきたが、完全ではなかった。11 年後にまた食道憩室を見つかり、さらに 2 年間経過をみて、食道憩室切除術を受けた。それ以来、胸内苦悶や動悸などの発作は 1 回も起こしていない。

4. マウス脳室内 T ヘルパー細胞の IL-2 と IL-6 の分泌に対するドバミンの促進作用
秋田大精神精神科
○増田 豊

種々多数の臨床経験から自律神経系と免疫系の相互作用が予想されているが、現在のところ、その機序を明確にする報告はなかった。今回、発症者は自律神経が障害にも存在すること、リンパ球がノルアドレナリン、アドレナリン、ドバミンおよびノーザルコリンのレセプターも存在することから、これら自律神経終末の